



ネパール被災地から乗田さん(画家・)へ手紙

日本の支援で開校14年地震で倒壊



シート内で勉強する子どもたち。雨期に入り、雨が入り込んでくると勉強もできそうにない

村人たちと学校再建へ

唐津市在住の画家乗田貞勝さん(70)のもとに、ネパール大地震の被災地の現状を伝える手紙が届いた。差出人は同国出身で横浜市の大学教員リジャル・ホーム・パハドゥルさん(45)。2人は15年前、カトマンズで出会い、乗田さんはリジャルさんの故郷の学校建設を支援してきた。その学校校舎が倒壊してしまった。

壁が崩壊した教室。黒板も押しつぶされている。首都カトマンズから約50キロ、震源地の隣県で標高1500メートルの山中にあるダディン郡サッレ村。幸い村人は無事だったが、5月中旬から1週間、故郷に戻ったリジャルさんが見たのは学校と家々の深刻な姿だった。

学校はリジャルさんの日本の友人らの支援を受けて2001年完成した。現在の村の小中高校生約260人が通う。一見大丈夫そうな教室もあるが、壁に亀裂が入り、いつ倒壊するか分からない。リジャルさんらは村人と校庭にシートを張って教室を急造した。

それでも心配は尽きない。村は寒暖の差が激しく、昼間は30度を越す。6月から雨期に入り、雨が入り込む屋外では勉強できない。「このままだったら学校が閉鎖されるのでは」。住民と生徒は不安がる。

ネパールの教育環境は厳しい。学校が完成するまで、サッレ村の子どもたちは隣村まで険しい山道を3時間歩いて通った。家業の農業を手伝う働き手でもあり、通学に時間がかかると学業を断念せざるを得ない。

リジャルさん自身、同様の境遇で育ったが、日本人の支援や奨学金で留学

し、現在は今回現地に派遣してくれた東京都市大学環境学部の准教授を務める。教育の大切さを知るだけに、学校の行く末を案じる。

乗田さんはバリ島画家で知られるが、1997年から4年間、エベレストや釈迦の生誕地ルンピニに通った。2000年、空港の待合室でリジャルさんと出会った。「目の輝きに、こんな青年が国を引っ張っていくのだろうと思った」と言い、以来、「ささやかながら」支援を続けてきた。

地震発生から2カ月。「再建は長い道のりになりそうだが、乗田さんのような支援者の存在が心強い」とリジャルさん。学校運営を支援するNPO「パール・ビバル奨学金」などの協力を得ながら、村民と再建へ踏み出す。支援窓口は同基金。http://barpeepal.com/

(吉木正彦)

■ネパール大地震 2015年4月25日発生したネパール大地震では、死者が周辺国も含め8900人を超え、家屋約80万棟が全・半壊した。震源に近いカトマンズや山間部を中心に、れんがなどで造られた伝統住宅が倒壊し、大きな被害を出した。復興には67億ドル(約8300億円)が必要との見通しで、ネパール政府は各国に支援を要請している。



①教室には亀裂が入り、いつ倒壊するか分からない。校庭に張ったシートが臨時の教室だ
②東京都市大学の同僚らのアドバイスを受け、トタン板とレンガで造った仮設住宅。手前がリジャルさん
③壊れた黒板の代わりに、日本から持参したロール状の黒板をベニヤ板に張って、さあ授業

▶電子新聞に 複写写真



日本からの支援で2001年完成した待望の校舎。地震で全壊状態に